

第三章 光る源氏の物語 男踏歌

[第一段 男踏歌、六条院に回り来る]

今年は*男踏歌あり。 *注に<男踏歌は隔年または数年を隔てて行われた。正月十四日の夜に行われる。>とある。「踏歌(たふか)」は<中国から伝わった集団歌舞。足を踏み鳴らして歌い舞うもので、平安時代には宮中の初春の行事として盛行、正月14日に男踏歌、16日に女踏歌が行われた。その歌詞は、元来は唐詩、のちに催馬楽(さいばら)も用いられ、歌の終わりに「万年(よろずよ)あられ」と唱えたので「あらればしり」ともいう。>と大辞泉にある。また、Yahoo!百科には「踏歌節会(たふかのせちゑ)」の解説に<正月14、16日に行われた宮廷行事。歌の上手な男女を集めて、年始めの祝詞を歌い、舞わせた。大極殿、清涼殿に天皇が出御し、14日が男踏歌、16日が女踏歌とされていた。いずれも天皇の長久と、その年の豊穰(ほうじょう)を祈るのを目的とした。>とあり、<男踏歌は、天皇の前で舞踏ののち、京の町中を回り、大臣の家の水駅(みずうまや)で休息し、湯漬けをいただき、夜明けまで回るのが特徴であったが、983年(永観1)に終わり、女踏歌だけが平安時代末まで盛んに行われた。もっとも、男踏歌は宮中では早くに絶えたものの、名古屋の熱田神宮などでは現在でも正月の行事として残っている。>とある。ということは此処の文章のルポこそが、当時の催事の様子を最も良く伝えるものの一つ、なのかも知れない。なお、女踏歌についてはYouTubeに大阪住吉大社踏歌神事の一部がアップされていた。

内裏より朱雀院に参りて、次にこの院に参る。道のほど遠くなどして、*夜明け方になりけり。月の曇りなく澄みまさりて、薄雪すこし降れる庭のえならぬに、殿上人なども、物の上手多かる*ころほひにて、笛の音もいと*おもしろう吹き立てて、この*御前はことに心づかひしたり。*「よあけがた」は日の出前の30~40分で、有明の十四夜のほぼ満月というから、6時~6時半ぐらいだろうか。「道のほど遠く」とあり、二条から六条までの道のりもあったろうが、宮中でも朱雀院でも実義たる祝儀の宴会に時を費やしたのだろう。 *「ころほひ」は<その当時の状況>ではなく<当節、今の状況>と古語辞典にある。つまり「ころほひにて」は<昨今のことなので>という言い方だが、昨今頃に名家の子息に笛の名手が多いと言う、などと言うのは弁チャラの常套句だから、その華やいだ軽口調で「この御前」に特に若い男が関心を寄せていた、という事を描写するという筆致。 *「おもしろう」は「上手多かる」を受けた間接表現で、<よほど上手が多く居るらしく何とも見事に>という言い方だが、実際には上手が多く居るのでは無く、数名の殿上貴公子らが<思惑ありげに実に熱心に演奏演舞していた様子>を揶揄気味に描写している、ワケだ。 *「おまえ」は殿の前だが、殿の座す六条院南殿庭先には六条院の女たちが舞踏隊の見物に集い出座しているのであり、殿上人が「こころづかひした」る関心は、殿が公然とお披露目を旨としているところの最近見つかったという西の対の姫君にあることは自明である。

御方々物見に渡りたまふべく(花散里と明石御方に見物に御出でなさるようと)、かねて御消息どもありければ(かねてお知らせがあったので)、左右の対、渡殿などに(それぞれ左右の対屋への渡廊下に)、御局しつつおはさす(衝立で仮部屋を仕切って囲んだお席を用意して御座していらっしやいます)。

西の対の姫君は(夏の町の西の対の姫君は)、寝殿の南の御方に渡りたまひて(春の町正殿の南廂にお座りなさって)、こなたの姫君に御対面ありけり(明石姫君と御対面なさいました)。上も一所におはしませば(正夫人も同席していらしたので)、御几帳ばかり隔てて聞こえたまふ(対の

姫は几帳越しに御挨拶申しなさいます)。

*朱雀院の後の御方などめぐりけるほどに、夜もやうやう明けゆけば、*水駅にてこと削がせたまふべきを、例あることより、ほかにさまことに加へて、いみじくもてはやさせたまふ。 *「すざくみんのきさきのおんかた」は注に<弘徽殿大后は朱雀院の院内にある柏梁殿にいた。>とある。「柏梁殿」は「はくりやうでん」だろうか、大辞泉には「柏殿(かへどの)」として<平安時代、朱雀院にあった皇后の御所。>と説明されている。何処か別の文に明示された記述があるのだろうか。 *「みずうまや」は注に<六条院は「水駅」として簡単な饗応の場所に予定されていたが、異例の御馳走で饗応した。「水駅」は「飯駅」に対する語句。>とある。水飲み場、くらの簡単な一時休憩所、ということだろうか。「飯駅(いひうまや)」が正規の立ち寄り処、ということらしいが、この対比は帝と前帝の権威を憚った源氏大臣の臣下としての謙遜表現でしか無い。ただの休憩所は駅ですらないだろう。六条院は正規の立ち寄り処に他ならず、「事削ぐ(簡素にする、簡略に済ます)」との言い方も臣下としての遠慮した体裁を心得た方便に過ぎない。ざっと男踏歌が徹夜の祝賀行事だとして、夜明けを以って御開きと成るものだとしても、いくら他所で時間を費やして「夜もやうやう明けゆけ」たからと言って、「水駅にてこと削がせたまふべき」というのは飽く迄も帝に対して謙遜した物の言い方であって、道理の説明では無い。恐らくこの文は、こうした言い回しから当時の身分意識や実権の在り様を探って、この催事の空気感を汲み取るべきなのであって、理屈を立てて言い換えるべきでは無いのだろう。したがって、「例在る事より他にさま殊に加へて」は<普通の時とは違って特に豪華に>だろうが、内大臣だった二条院の場合でも其相応の歓待は為したに違いなく、例年なら簡素な飲食物を今年に限って豪華に用意した、というよりは対の姫のお披露目の意味を込めて案内や取次ぎに用立てるべく対貴公子らの接待係を多く揃えて手厚くもてなした、というのが「いみじくもてはやさせたまふ(殿は一行を大歓待させなさいました)」の意味かと思う。

影すさまじき暁月夜に(照り返しが一層寒々しい夜明け前の月夜に)、雪はやうやう降り積む(雪が薄っすらと降り積もっています)。 *「かげ」は月の光、照り返し。「すさまじ」は「すさみ(凄味)」が「増す」で<一層冴える>。「あかつきづくよ」は空が白む直前のまだ暗い夜空の月夜。「やうやう(漸く)」は晴れた月夜のことなのだから、雪が降り続けていた筈は無く、<次第に>ではなく<薄っすらと>雪が降り積もる。この描写は実は、段頭に「月の曇りなく澄みまさりて、薄雪すこし降れる庭のえならぬ」と、踏歌隊来訪時の六条院総観が既に述べられていたことの詳細に入る際の繰り返しだ。

松風木高く吹きおろし(松の木の上から冷気が吹き下ろして)、*ものすさまじくもありぬべきほどに(震え上がりそうなほどの寒さに)、*青色のなえばめるに(青ねずの柔らかい上着に)、*白襲の色あひ(白い内着を重ね着した一行の装いには)、何の飾りかは見ゆる(何の飾り気も見えませんが)。 *「ものすさまじ」は<物凄いい寒さ>。 *「あをいろ」は「麴塵(きくぢん)」ともあり、色見本だと<青ねず>。上品だが地味な色合いで、「麴塵の袍」は<天皇の日常着で、蔵人が天皇から賜って着用することもある>と古語辞典にある。 *「しらがさね」は<白い内着、下着、肌着>とあり、夏の衣装ともあるが、「かさね」は<重ね着>であるらしく、初春とは言え未だ寒いこの時期であってみれば<白い内着の重ね着>のことなのだろう。

*挿頭の綿は(かざしのわたしは、だから冠に付けた真綿は)、何の匂ひもなきものなれど(飾りではなく防寒用の耳当てだったが)、*所からにやおもしろく(六条院の華やぎの中では趣向があるように見えて)、*心ゆき(一行は楽しく気持ちも弾んで)、*命延ぶるほどなり(寛いで人心地付いたようでした)。 *「かざし」は<髪飾り>だが<冠飾り>のことも言ったらしい。「わたし」は木綿ではなく真綿

のこのようだ。「まわた」はくず繭などを煮て引き伸ばして作った綿。じょうぶで軽く、保温力が大きい。防寒用衣類、紬糸(つむぎいと)の原料などに用いる。《季冬》>と大辞泉にある。裸の布団綿のままでも雪の白さに映えて面白そうだが、布で包んだ造作をした物かも知れない。冠につけたのだから、襟巻きでは無く耳当てなのだろう。 *「ところからにや」は注に<六条院という場所柄のせい。>とある。 *「心行く」の主語は踏歌隊一行と読みたい。 *「命延ぶ」は<寿命が延びる→人心地付く>と<のびのびする、寛ぐ>の掛詞と読みたい。

殿の中將の君、内の大殿の君達ぞ、ことにすぐれてめやすくはなやかなる(その若い貴公子たちの中でも、殿の子息である中將の君と藤原内大臣の子息である若君たちが、殊に優れた見映えで華やかです)。

ほのぼのと明けゆくに(ほのぼのと空が明けて行く時に)、雪やや散りて(雪が少し降って)、そぞろ寒きに(ぐっと冷え込んだところに)、「*竹河」謡ひて(一行が催馬楽の「竹河」を謡って)、*かよれる姿(拍子を合わせて左右に足を踏み寄る姿の)、なつかしき声々の(若々しい歌声を)、*絵にも描きとどめがたからむこそ口惜しけれ(絵に描き留められないのが残念でした)。 *「たけかは」は注に<催馬楽・呂「竹河の橋の詰めなるや橋の詰めなるや花園にはれ花園に我をば放てや少女(めざし)たぐへて」>とある。花園に遊ぶ華やぎの歌かもしれないが、「竹河」が何処の何を指すのか不明で、如何してこの歌が踏歌で謡う習わしになったのか全く分からない。「めざし」は<子供の頭髪を目を刺すくらいの長さに切り揃えたもの。>と古語辞典にあり、転じて<子供のこと。>ともある。「少女」と表記されるのは<幼女>の意味なのだろうか。「たぐふ」は「伴ふ」で<手を取って遊ぶ>。ただ、祝い歌の催馬楽なら、およそイヤラシイ意味が無いと宴席は盛り上がらない。 *「かよる」は< [動ラ四] 《「か」は接頭語》 寄り添う。一説に、ゆらゆら動く。>と大辞泉にある。が、良く分からない。踏歌らしい姿を想像しようにも、足を踏んで拍子を合わせる事ぐらいしか思い付かない。 *絵にも描けない美しさ、は写真や動画が簡単に記録できる昨今のデジタル技術社会に於いても、本質的には生き続けている言い方ではある。今風の話題で言えば、ウサイン・ボルトの文字記録は映像記録の臨場感に遠く及ばないが、関心の核心は記録では無くボルト本人に対する今後の期待だ、というワケだ。何処か、時代を切り開いている者と時代を彩る者との違い、にも通じる気もする。とは言え、今の時代にこの物語を読むことが、主人公の实在や読者の同時代生活感性を離れても少なからぬ意味を持っている、と私のようなものが思っていることを見ても、両者は主客では無く役割の違いで、引いてみれば戯作者も脚色者も現代人からは等距離にいて両者総体で人類の資料を提示している事になる。さらに一般的に考えてみれば、写真や動画が技術的に得られない時代に於いての其の獲得をある意味で単純に希求する思いと、何がしかの記録技術を得た後の人々の思いとでは、「絵にも描けない」という言葉の重心は大きく違うと思えてならない。尤も、最も先鋭的な画像技術者は今尚ある意味で純粹に事象の画像再現性を追及し続けて居るだろうし、再現性の追及によって被験者個人にとっての疑似体験を新たに得ることで再現性を超える事態すら在り得るし、絵でも写真でも文章でも資料として客体視する以前に其自体が作者の作画力による創作だ、などという逆説満載の今日の状況ではあるが、ヒトが事象認識に画像からの情報に圧倒的に頼る光学性の強い物性生命体であるが故に、その記録技術を獲得した事は其れ以前とは格段に違う世界に人類が入った事に成らざるを得ない。大変な課題だ。写真に魂を抜かれるとか、時間を奪われるとか、が決して想念上の事柄ではない、と認識するに至った、という厄介な時代だ。

御方々(見物の御夫人たちの)、いづれもいづれも劣らぬ袖口ども(どなたもが艶やかに御簾の下から覗かせた袖口が)、こぼれ出でたる*こちたさ(こぼれ出た賑々しさと)、物の色あひなども(多様な色合いなども)、曙の空に(次第に明るくなる朝空に)、春の錦たち出でにける霞のうちか

と見えわたさる(春の百花繚乱が暖気の訪れを告げて立ち上る霞の中に淡く見える景色のように見渡せます)。あやしく心のうちゆく見物にぞありける(庭の冷気の中で若人が上げる歌声と其れを見守る六条院の女たちが感じさせる優しさの、この不思議な取り合わせは何とも印象的な光景なのでした)。*「こちたさ」は良く分からない。「こちたし」という形容詞は「言痛し」と表記されく口煩い、喧しい>や一般にく甚だしい、仰々しい>とあるので、その名詞化の<賑々しき>とした。

さるは(片やその庭の一行はと言えば)、*高巾子の世離れたるさま(冠に綿を付けたふざけた格好や)、*寿詞の乱りがはしき(祝言挨拶をほろ酔い気味に大声で唱和したりして)、をこめきたることを(滑稽な姿を)、ことごとしくとりなしたる(和気あいあいと殊更大袈裟に繰り広げて)、なかなか何ばかりのおもしろかるべき拍子も聞こえぬものを(本来の踏歌の風情ある調子を欠く嫌いは在ったものの、)。例の、綿かづきわたりてまかでぬ(お決まりの防寒衣類を各自が褒美に頂いて引き上げたのです)。*「かうこじ」の「巾子(こじ)」は<冠の頂上後部に高く突き出ている部分。髻(もとどり)を入れ、その根元に筭(こうがい)を挿して冠が落ちないようにする。>と大辞泉にあり、布を漆樹脂で塗り固めて頭上に高く立てる独特な形状だから、特に「高(かう)」と言っても其自体は平安当時の通常の冠様式なので、この「高巾子」は単に冠装束のことを言い換えただけ、と独断する。むしろ此处の言い方は、其の冠姿が「挿頭の綿は何の匂ひもなきもの」とした先の説明を受けて、其れを「よばなれたるさま(儀礼にしては気取りが無い不躰さ)」と評価する事でくにも関わらず寒中の若者の集団ゆえに許される親しみのある風情>を言い表す技法、なのだろう。*「寿詞(ことぶき)」については注に<『完訳』は「豊年を祈る言葉が生殖祈願に通じるところから、色恋の「乱りがはしき」内容を含む」と注す。>とある。では注釈は、作者が<一行が好色めいた挨拶をした>ことを敢えて描写したと言うのだろうか。同意できない。挨拶は挨拶だ。その挨拶の定型文に色っぽさが含意されていたとしても、それは挨拶文の成り立ちの話題であり、その挨拶自体の味わいであり、であれば寧ろ律儀に言ってこそ「おこめきたる」のかも知れず、であれば「おもしろかるべき拍子」は損なわない。だから、この「乱りがはしき」は飲酒の若者集団らしく厳かさを欠いた、くらいかと思う。

[第二段 源氏、踏歌の後宴を計画す]

夜明け果てぬれば(日の出で夜が明け切ったので)、御方々帰りわたりたまひぬ(御夫人方はそれぞれの御殿にお帰りなさいました)。大臣の君、すこし大殿籠もりて、日高く起きたまへり(殿は少しお眠りになって日が高くなってからお起きになりました)。「夜明け果つ」は日の出だから遅くても7時くらい。「日高し」はざっと日中だから時刻は絞りにくい、公務が無いのなら昼近くでも支障は無いらる。

「中将の声は(我が息子の中将の声が)、*弁少将にをさをさ劣らざるは(藤原大臣の次男の弁少将に少しも劣らないようだったとは、)。あやしう(不思議なくらいに)*有職ども生ひ出づるころほひにこそあれ(芸達者たちが多く生まれ出た昨今の時勢の廻り合わせのようだな)。*「べんのせうしゃう」は注に<内大臣の次男、「賢木」巻で「高砂」を歌った美声の人。>とある。ところで、濔標第一章第三段に「かの四の君の御腹の姫君、十二になりたまふを、内裏に参らせむとかしづきたまふ。かの「高砂」歌ひし君も、かうぶりせさせて、いと思ふさまなり。」という記事があり、同注に<かの「高砂」歌ひし君>は<「賢木」巻に見える。四君腹の二郎君。現在、十二、三歳。元服させる。>とあった。「濔標」巻は六、七年前の話なので、当時12歳なら今は18,9歳の年周りだ。「次男」なのだから「長男」を差し置いたの登場のようにも見えるが、中将の

君が15歳なので、恐らく最も仲の良い幼馴染同士で、よく一緒に遊んでいたということを表す語りなのだろう。あまり内情を詮索するよりも、お祭り気分の和やかさを読み取るべきかも知れない。しかし当時の、それも雲上世界の実情など知る由も無い私などは、書き残された文から出来るだけの周辺事情を読み取らないと、とてもじゃないが話に追いつけない、という恨みはある。*「いうそく」は<学識者、典礼に通じた人>などとあるが、此处では<諸芸に通じた人、芸達者>。

いにしへの人は(先輩の藤原殿は)、まことにかしこき方やすぐれたることも多かりけむ(堅い学問の方面では優れた成績を収めたことも多いようだが)、情けだちたる筋は(風雅の方面に於いては)、このころの人にえしもまさらざりけむかし(新進の藤原殿に必ずしも勝ってはいないようだ)。「いにしへの人」は内大臣で、「このころの人」は弁少将に違いない。それを態々ぼかして言うイヤラシさはなかなかの味わい、と読むべきかと思う。

中将などをば、すくすくしき朝廷人にしなしてむとなむ思ひおきてし(中将などは生真面目な官僚に育てようと心積もりして)、みづからのいと*あざればみたる*かたくなしさを(我ながらのどうもその場の雰囲気左右される愚かしさを)、もて離れよと思ひしかども(引き継がないようにと思っていたが)、なほ*下には(やはり人間性に於いては)ほの好きたる筋の心をこそとどむべかめれ(多少の風流心を残すべきものようだ)。もてしづめ(冷静で)、すくよかなるうはべばかりは(建前だけを言うばかりでは)、うるさかめり(角が立つだろう)」*「あざればむ」は「戯ればむ」と表記され<ふざけがち>と古語辞典に説明される。此处では公務が話題なので、<ふざける>というよりは<常識外>とか<情緒的>な傾向を言うのだろう。*「かたくなしき」は「頑しき」と表記され<偏屈で片意地を張る様>と古語辞典に説明される。その延長線上だろうが<見苦しい、物分りが悪い、愚かしい>の意味ともある。*「した」は<心の中>とある。が、さらにこの文は「筋の心」と重なるので、此处の「下」は「上(政務)」が担うべき杓子定規な公正さの「下(根底)」にある<人間性>と読んで置く。

など(などと殿は夫人に仰って)、いとうつくしと思したり(中将君をととても上出来に御思いでした)。「*万春楽」と、御口ずさみにのたまひて、*「万春楽」は「ばんすらく」と音読みがあり、古語辞典に<男踏歌の時に歌う曲で七言八句の漢詩。漢語発音で謡い、句の終わりごとに「ばんすらく」と唱和する。「ばんすらく」「ばんしゅんらく」とも。>と説明されている。多分、<バンザイ>とか<いや目出度い>くらいの囃子言葉になる、かと思う。源氏大臣も若い時には舞踏隊に加わって唱和したのだろうか。

「人びとのこなたに集ひたまへるついでに(当家の女たちが一同にこの春の町に集いなさった記念に)、いかで*物の音こころみてしがな(ぜひ皆で演奏会を試してみたい)。私の後宴すべし(わたくしのごえんすべし、当家なりの打ち上げ宴会を開くことにしよう)」*「もののねこころむ」は<演奏を試し合わす>。

とのたまひて(と殿は仰って)、御琴どもの(弦楽器類の)、うるはしき袋どもして秘めおかせたまへる(美しい袋などに大事に仕舞って置いた物どもを)、皆引き出でて、おし拭ひ(すべて取り出して拭き上げて)、ゆるべる緒、調へさせたまひなどす(緩めて在った弦を張って調律させたりなさいます)。御方々(奥方たちは)、*心づかひいたくしつ(演奏準備を念入りにして)、*心懸想を尽くしたまふらむかし(緊張し尽くしなされることでしょう)。*「こころづかひ」は<用心、配慮>

とある。演奏に粗相が無いように使い馴れた撥やツメを点検するとか、正月用の曲を復習って置くとか、したの
らう。*「こころげさう」は<相手を意識して自分を良く見せようと気負う>ことらしい。一堂に会すれば必ず比較
されるのだから、否応無く競争心を煽られる。相当に自制したとしても、引けは取りたくないだろうし、少なくと
も失敗は避けたい。是は殿の悪乗り、かも知れない。

(2010年12月22日、読了)